

キャリアパス支援講演会 実施報告書

【演題】個別化治療を目指した新薬”アレクチニブ“の研究開発
ーダイバーシティ実践による製薬企業での夢の追求ー
【講師】青木 裕子 氏（エーザイ（株）癌領域ポートフォリオ
マネジメント部シニアディレクター）

【日時】平成 31 年 2 月 1 日（金） 15：00～16：30

【場所】岐阜薬科大学本部 第二講義室

【参加者数】106 名（うち女性研究者 10 名）

所属機関：岐阜薬科大学 97 名、岐阜大学 1 名、
岐阜女子大学 2 名、アピ(株) 6 名



講師は、大学時代に“個別化治療”について学んだことから、その有用性に惹かれ、個別化治療の実現に関わる仕事に携わりたいという目標を持った。その夢を持って創薬・開発を続け、肺癌の新薬を世に送り出すことができたという。本講演会では、その薬剤開発に関する企業の視点や、開発時の話をデータを示しながら話をしていただいた。

大学院薬学研究科を修了後、製薬会社であるホフマン・ラ・ロシュの研究所に就職し、新薬の創製・開発に携わった。そこでは様々な知識が必要とされ、学生時代に化学、物理学、生物学などの幅広い分野の学問を学ぶことができたことのありがたみを痛感したという。自分の専門ではない分野も理解できるということが、本当の意味でのチームワークと創薬の生産性に繋がるとの考えを示された。

研究から開発・申請承認に至るまでには様々なプロセスが必要で、国内に限らず海外チームとの連携も欠かすことのできない重要な要素であった。そこでは自身が女性ということもあり、実に多様な方々との議論・連携が功を奏したということであった。

学生の中には現在取り組んでいる研究課題と関連させて聴講していた者もあり、質疑応答時には積極的に質問をする姿も見受けられた。



当時はまだがん領域の個別化治療の市場は小さく、新薬開発の成功率は非常に低いものである。企業は収益高上が求められる中、利益が見込まれないと考えられていた薬剤の開発をどのように進めてきたのか、あきらめることなく続けてこれたのはなぜかという質問があった。これには、個別化治療には将来に有用性があること、また患者数を全世界的に見て理詰りで上層部を説得したという話であった。

研究に関する話の後、講師のキャリアパスについて

てお話しいただいた。結婚、出産、介護と経験されながら、研究部長などの管理職にも就任されてきた。

<製薬企業の研究者として気を付けてきたこと>

“創薬”のみを目標とした。すなわち、仕事は”研究“や”出世“のためとはしなかった。

創薬はチームワークである。チームワークを醸成するためには、①女性であることに甘えない、②仕事を一緒にするメンバーのモチベーションをいちばんに考える（性別・部署・ポジション・地域／国を意識しない）、③創薬リーダーとしての役割を果たすために、自分のプロフィール（博士号、ポジション、英語能力など）を長期的に作る、④前職について自分からは話さない、ということ意識して努めてきた。

特に、博士号を持たないと外国では相手にしてもらえないという話もあった。また現在も海外出張を多くこなしているという。英語力向上については、最初の勤務先であるロシュの時代、会社の制度を利用して語学留学をしたそうである。自分から積極的に取り組む重要性も伝わったと思われる。

新薬開発という成果を上げた後、確かに昇進や昇給はあったそうである。ただより長く創薬に携わりたいという希望もあったところ、折よく声がかかった現在の企業に転職したということであった。

今回の講演会では学部生が多く聴講していた。卒業後のキャリアパスがイメージしやすかったのではと思われる。企業研究者のロールモデルを知ることができ、また自分の現時点の課題や、今後に向けて取り組むべきことなど、具体的に考えることができる有意義な機会となったと思われる。

